特集

倉橋から子どもたちへの伝言

届けられたメッセージ

松井とし

それは平成十八（二〇〇六）年十一月二十五日、お茶の水女子大学附属幼稚園創立一三〇周年記念式典の日の出来事でした。大学の講堂、徽音堂で行われた記念式典に引き続き、午後は幼稚園の遊戯室で同窓会主催の祝賀会が開かれていました。

会は卒業生のピアニスト江戸京子さんのピアノ演奏により始められ、古い写真が次々に映し出されると「あっ、あれは私です」などという声も聞かれ、遊戯室のあちらこちらに懐かしい想い出話や笑い声が満ち、和やかな雰囲気に包まれていました。

そのような中、はるばるカナダから式典にも出席された卒業生コピソン珠子さんにより、倉橋惣三が第二次世界大戦開戦時に年長児だった子どもたちの卒業に際してつづったことば「**大きくなってから思い出してもらうために**」が朗読されたのでした。

「昭和十六年十二月八日。あのアメリカとイギリスとに対する宣戦の御詔書がありました日、あなたは此の幼稚園にいました。この日は、日本は素より、世界にとって、永久におぼえられる日です。あなたは、ほんとうに大きな日に幼稚園にいました。」

開戦の日は、わが国のみならず世界にとって後に歴史の節目となる重要な日であること。そしてその日に他園ではなく自分と共にこの幼稚園にいたことを忘れないでほしい、という倉橋の強い願いが「ほんとうに大きな日に幼稚園にいました。」という表現に表されているように思われます。

戦争が始まり、子どもたちの大好きな平和の園、幼稚園生活の環境も変わり始めました。戦時下の附属幼稚園の様子は倉橋が著した「子供讃歌」に次のように書かれています。

「幼児らは戦争をよそに楽しく遊んでいる。運動具がある。おもちゃがある。友だちの笑声がある。先生方の笑声がある。砂場に近い小山の下には防空壕が掘ってある。遊戯の時に避難演習の一斉行動も演習してある。幼児たちの間では、ゆうべの警報の噂について、わざとおびえあうような地獄童話も行われるが、それだから、先生はつとめて楽園童話で、小さい非戦闘員の可憐な魂から、地獄のおびえを除くことにつとめる。—彼自身は巻脚絆に鉄かぶとの身ごしらえ、先生方はモンペに防空頭巾のいでたちを守り、バケツには水を張り、砂を盛り室ごとに火たたきを立てると共に、三角巾入りの薬かばんを備えることを忘れず、幾日分かの貯蔵食糧を積み重ねて、身を以て幼児を護る覚悟をしながらも、幼児らには、非常時だからこそ常時以上のなごやかな楽しい幼稚園を与えることにつとめる。[注1]」

森上史朗は、故菊池ふじの言葉を紹介しています。

「倉橋は戦争反対者であったが『子どもは周囲からは切り離すことはできない。周囲の人たちのやり方を無視しては保育は成り立たない』という考え方を強くもっていた[注2]」

この考えは現行の幼稚園教育要領に貫かれている幼児期の教育の基本に通じる信念だと思われます。すなわち「本来、人間の生活や発達は、周囲の環境との相互関係によって行われるものであり、それを切り離して考えることはできない[注3]」ということから、幼稚園教育は「環境を通して行われる教育」であることを基本としています。

戦争という負の環境の変化と対峙しつつ、倉橋は子どもたちの心を支える人的環境として先生方と共に心を砕いていたのです。その心境を「**幼児と共にいるものの心づくし**」という文章に表しています。

「**苛烈なる戦下に、今年も暮れてゆくというよりは、年の暮るることなど想う暇もないのが、われわれおとなの心である。（中略）しかし、子ども殊に幼い子らに対しての心づくしは、それとはおのづから別である。幼い子らに対する戦下の心づくしは、一面戦下の少国民として、しっかり戦時を生活させると共に、また一面、戦時から彼等の生活を護ってその成長を能う限り豊富に充実させてやりたいことである。心に天下の憂いを抱きながら、われわれが日々幼児と共に嬉戯しているのも、この心づくしからに他ならない。[注4]（後略）**」

与えられた環境の中で楽しみを見つけ、シンガポール陥落を祝う旗行列でさえも元気に行うけなげな子どもたちが降園し、静まり返った園内。あの長い廊下をひたひたと押し寄せる戦争の足音。戦局は悪化の一途をたどる中、倉橋は子どもたちと社会との狭間に立ち、忸怩（じくじ）たる思いでさまざまな方面に気配りをしつつ、幼稚園を守る「盾」になっていたものと推察されます。国の直轄の幼稚園主事（園長）として表だって反戦を唱えることはできなかったのです。

当時の緊迫した状況について、次のようなエピソードが伝えられています。

「**菊池ふじのの回想によると、倉橋は自由主義者として、軍部ににらまれていたので、『幼児の教育』の紙の配給が受けにくいという理由で、菊池が倉橋の代わりに編集を担当し紙の配給を受けに行っていたことがある**[注5]」

津守真は、倉橋が真正面から軍部と対立し、これを批判しなかったのは、当時、幼稚園の閉鎖令が多く出される中で、幼稚園を守ろうとする姿勢のあらわれではなかったかと語っています。[注6]

卒園生で照明デザイナーの石井幹子さんは昭和十九年の在園当時を次のように回想しています。

「**正門前の「大塚窪町」駅で都電を降りてから校内の銀**

杏並木に入ったとたん、警戒警報が鳴り出したのである。（中略）、玄関に飛び込んでやっと生きた心地をとり戻した。私たちにとって、このがっちりとした建物は、何にも増して安心感を抱かせるシェルターであった。幼稚園の中は静かで、いつものように廊下には、丸窓から差し込む光と、ステンドグラスからもれる優しい彩りの光で、私はやっと人心地ついたものである。[注7]」

損傷なく、いまなお愛らしい雛人形や五月人形、日米の架け橋となるべくアメリカからやって来た青い目の人形メリーさんを見るたびに、倉橋と先生方が凛とした強い意志をもってあの戦争と向き合い、子どもたちの心と幼稚園を守り抜いたことを感じることができます。

冒頭で紹介した文章の中で、倉橋は戦時中の幼稚園の実情を淡々とつづっています。しかし、最後の一節では「勝利、勝利、勝利。どこまで書きつづけてゆきましょうか。その喜びの中に、あなたの幼稚園を卒業する日が一日々々と近づいて来るのです。」と記しています。ここには「大きくなったら思い出してほしい」と子どもたちに平和への希求を託した倉橋の真意が込められています。

この文章は公表されず、これまでの倉橋研究にも取り上げられてこなかったとのことですが、六十五年の時を経て、倉橋が愛し、守った附属幼稚園の創立記念の日に届けられたメッセージとなりました。

（淑徳大学専任講師）

注

1　倉橋惣三文庫2『子供讃歌』二〇〇八年　フレーベル館
2　倉橋惣三文庫7『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（上）』二〇〇八年　フレーベル館
3　幼稚園教育要領解説　平成20年　文部科学省　フレーベル館　二〇〇八年
4　『幼児の教育』第四十四巻第十一号
5　2に同じ
6　『幼児の教育』第八十三巻第十一号参照
7　『時の標』お茶の水女子大学附属幼稚園　フレーベル館　二〇〇六年

（引用文はすべて新字・新仮名遣いに直した）